

◎横浜のサッカー文化

①横浜にサッカー文化の種を播く横浜F・マリノスのホームタウン活動

■松本喜美男

1 サッカーの楽しさ、素晴らしさを市民の皆さんに実感してほしい

今春スタートした「ふれあいサッカー」プロジェクトの一環であるENJOY FOOTBALL（エンジョイ・フットボール）。横浜F・マリノス新子安グラウンドには、多種多様な市民の方々が集まっている。男性だけでなく女性の姿も。若い世代に、お年をめた方まで（一番の年長者は五十歳代）。サラリーマン、主婦など職業や立場もさまざまだ。

「いままでサッカーをしてみたい気持ちはあったが、私は経験者じゃないし、メンバーを十一人集めることもグラウンドで試合をすることも難しいので、こういう機会はうれしい」「見ている楽しさだけでなく、サッカー

をやる面白さと難しさを初めて実感できました。公式の指導ライセンスを持つF・マリノスのコーチのもと、参加者たちは思い切り走ってボールを追いかける。心地よい汗を流した全員の表情に一樣に満足感が浮かんでいた。横浜F・マリノスが「ふれあいサッカー」プロジェクトを始めたのは、昨年暮れの高秀秀信・横浜市長と小社の高坂弘己・前社長との対談がきっかけとなっている。「二〇〇二年のワールドカップに向けて、もつと深く広くサッカーを根づかせる手段はないだろうか」、高秀市長の問い掛けに横浜F・マリノスが答えたのが今回のプロジェクトである。

単に強いチームでなく、地域とともに歩むスポーツ文化の核となる。これがリーグがスタートしたときのコンセプトであり、ホームタウンの理念でもある。これに基づいて、F・マリノスもさまざまな地域活動を行ってきた。サッカー教室や、地域へのイベント出演、サイン会などを積極的に実施している。しかし、それらは社内のいくつものセクションが交渉先・折衝役となっていたため、一過性のものになりやすく、いわば「点」での活動に終始していたかもしれない。今回の「ふれあいサッカー」プロジェクトは、社内での窓口を完全に一本化することにより、地域的にも時間的にも「線」で結んでいこうというもの。その「線」がさらに有機的に「面」へと発展することにもなるはずだ。

2 サッカーキャラバンを全十八区で開催

「ふれあいサッカー」プロジェクトの企画内容は表のように大きな三本の柱がある。

表一「ふれあいサッカー」プロジェクト

I. サッカー・キャラバン	4年前から行っている巡回指導を拡大、充実させたもの
II. サッカー・フレンドシップアクション	①素人サッカースクール：30歳以上の初心者を対象とした気軽に参加できるサッカースクール ②シルバーサッカー観戦スクール：高齢者対象のサッカー観戦のための講座。ウォーキングから始めることによって健康増進にも役立つ ③サッカー懇談会：サッカーの話題を中心にF・マリノスのスタッフや選手を交えての地域懇談会 ④親子サッカースクール：親子のコミュニケーションを円滑にさせることを主目的としたサッカースクール ⑤障害者サッカースクール：バリアフリーをテーマにサッカーを楽しみ、技術レベルを向上させる ⑥F・マリノスから発信されるスクール等のイベント：グラウンド開放による「ENJOY FOOTBALL」や、企業とF・マリノスが協力して行うサッカー教室などがこれにあたる ⑦指導者育成：横浜市のサッカー協会にF・マリノスが協力して行う指導者講習会など
III. サッカー・ゲームプレゼンテーション	サッカーに、あまり馴染みのない方々に対してスタジアムに足を運んで観戦する機会を提供していく企画

- ①横浜にサッカー文化の種を播く
 - ②横浜FCの誕生と新しいチーム運営
 - ③横浜と少年サッカー
 - ④総合スポーツクラブを目指す「かながわクラブ」
 - ⑤フットボールクラブ本郷と栄区サッカー協会
 - ⑥座談会・指導者の求めるサッカー環境
- 1ーサッカーの楽しさ、素晴らしさを市民の皆さんに実感してほしい
- 2ーサッカーキャラバンを全十八区で開催
- 3ー行政とF・マリノスが手を携えて
- 4ーワールドカップは、大事なスタート・真のサッカー文化を構築するために

まずサッカー・キャラバンは小学校が対象。これは巡回指導として横浜フリューゲルスが四年前から行ってきたものだ。Jリーグ・クラブの小学生に対するサッカー教室は少年チーム（少年団）に対するものがほとんどだったが、横浜市内の少年サッカー・クラブは、すでにしっかりと指導者のもとでトレーニングが行われており、Jチームのコーチ派遣の必要度は高くない。しかし、逆に指導者不足に悩んでいる舞台が存在する。それが小学校の授業時間だ。小学校の教育現場は女性の先生が増えており、なかなか体育授業のサッカーで範を示しながら指導することが簡単ではない。

そこで体育授業の指南役として、F・マリノスのコーチが実技を見せながら、サッカーの楽しさ、スポーツの面白さを体験してもらうことをテーマとしている。また、対象となる小学生もサッカーに熱中していないことも大抵が大半。また、もちろん学校のカリキュラムのお手伝いなので宣伝や営業とはまったく異なる。学校生活の一環としてコーチは給食時間まで、ともにしてやることもあるくらいだ。

この活動は、当初から非常に好評でその活動実績の実数がニーズの大きさを示している（一九九六年度・横浜市内実施四区／指導対象者数六百三十五人、一九九七年度・四区／六千四十五人、一九九八年度・六区／七千八百五十八人、一九九九年・十二区／一万四百七十九人）。指導するのは、すべて日本サッカー協会のライセンス取得者。下部組織であるF・マリノス・サッカースクールでの

指導のノウハウが十分に生かされている。

先生方から感謝されているのはじめ、参加した子どもたちからは、たくさんのお礼の感想文が届いている。四月中旬の横浜市の校長会で企画を説明、すぐに依頼・問い合わせが殺到し、うれしい悲鳴を上げている。今年度は横浜全十八区をカバーする。もちろん参加者も過去最高となるだろう。

3 一行政とF・マリノスが手を携えて

サッカー・フレンドシップアクションは、横浜市の教育委員会、区の地域振興課、生涯学習支援係を窓口にしてF・マリノスが協力してサッカーの楽しさを伝えていこうというものだ。理念とか、構想とか、言葉でサッカーの楽しさを説得することは難しい。それよりも、このスポーツを体験してもらうことが一番の近道。ボールを蹴る面白さ、パスを交換し合うことから生まれるコミュニケーションが、どういふ副産物を与えてくれるか。スポーツを行うことにより、膨らむものは多い。

指導対象は、サッカーをする機会に恵まれているとはいえないカテゴリー。①楽々サッカースクールは基本的に三十歳以上が参加者の条件としているが、地域や行政の窓口との話し合いによってフレキシブルに対応している。例えば、中区で実施しているものは十八歳以上の初心者。②のシルバースタリオンは、お年寄りが対象。実際にボールを蹴って走ることではできなくともサッカーを楽しく見ることは出来る。そのためのポイントを提供していただこうというものだ

が、それだけでは面白みが少ない。横浜国際総合競技場という立派なスタジアムやそれに付帯している設備もあるのだから、それらを見学しながらウォーキングというメニューなら、健康増進にも役立つし運動に参加している満足感も得られる。

⑤の障害者サッカースクールはラポール（横浜市港北区／正式名称・障害者スポーツ文化センター・横浜ラポール）と二人三脚で実施している。六月十一日にはラポール内のグラウンドにおいて第一回障害者サッカースクールが行われた。障害者とサッカーといってもカテゴリーは知的障害者、肢体障害者、電動車イスの三つに分かれている。ラポールが窓口となり知的障害者の入門教室は年間十回程度のスクールを予定。実はこのカテゴリーは横浜市内にいくつものチームが組織されており、活発な活動が行われている。選手たちのチームを強くしたい、技術的にレベルアップしたいとの想いは健常者とまったく変わりはない。それだけに取り組む姿勢は真摯そのものだ。また彼らは大きな目標も持っている。それは夏に開催される都道府県別の全国大会だ。昨年度は準優勝だけに（優勝は静岡県）、今年こそはその意気も高い。この大会には選抜チームはF・マリノスのユニフォームを着てグラウンドに立つ。肢体障害者クラブは、夏以降に活動をスタートする予定で、電動車イスは指導カリキュラムやトレーニング方法を研究していくのを初年度の課題とする。

⑥を代表するのが「ENJOY FOOTBALL」。毎月一回実施しており、F・マ

リノス新子安グラウンドを開放している。インターネットのみと申し込み方法を限定しているにもかかわらず、その楽しさが人づてに伝わり、参加者は増える一方だ。予定を変更して秋以降は年齢などによってクラスを分けていかなばならないほどの盛況ぶりだ。

4 ワールドカップは、大事なスタート

「真のサッカー文化を構築するために」

「横浜のシンボルになりたい。今、その第一歩を踏み出します」。このスローガンのもと、横浜F・マリノスは積極的にホームタウン活動を行っている。「ふれあいサッカー」プロジェクトが、その中核だが、それ以外にも多角的なトライをしている。

運営評議会は市民やサポーターの代表によって構成されており、今年度からクラブの組織図に正式に組み込まれた。これは、昨年に発足したのだが、スタート時のクラブとサポーター・市民の対話の場としての機関から一歩進めて、クラブの活動全般に対するオプザーバー、またホームタウン活動組織の市民・サポーター側の統括セクションとして果たす役割は広がっている。この運営評議会は実際の活動機関として、いくつもの分科会を有

しており、それには基本的に誰でも加わる事ができる。

各地域の商店街との連携にはとくに力を入れている。市商連（横浜市商店街連合会）を窓口として、横浜ベイスターズと同じようにさまざまなイベントや企画を積極的に展開していく予定だ。横浜市内には四百を超える商店街があるが、第一ステップとして、九月からその中の九十一の商店街がF・マリノスを応援してくれることになった。また、すでにいくつかの試みが進んでいるところもある。イセザキモール一、二st（ワンツーストリート）は、クラブスタート時からチームスポンサーに加わっていただき、選手参加のイベントなどが数多く行われてきた。笹野台商店街はF・マリノスの街としてのイメージが浸透したストリート。F・マリノスの試合のある日は店先にF・マリノスカラーであるトリコロール（青・白・赤の三色）の旗がずらりと掲げられ、商店街主催のサッカースクールも地元の小中学校で開催された（F・マリノス選手がコーチを務めた）。この他にも新横浜ASTYには、ファンクラブの会員証で特典を受けられるお店がいくつもあり、さまざまな企画やイベントも行われるなど、ホームスタジアム（横浜国際総合競技場）のある地元と

して、クラブと密接な関係が築かれている。

ワールドカップは単にスポーツイベントに止まらない。その国、その地域の文化や社会経済、歴史にも波及する。前回一九九八年のフランス・ワールドカップは、地元チームと開催市がスクラムを組んで、決勝戦の素晴らしい舞台を世界中にアピールした。二〇〇二年の横浜においても、トップ・クラブのF・マリノスが果たすべきテーマは小さくない。現在行われている横浜F・マリノスのホームタウン活動は、ワールドカップの成功をめざす横浜市の願いと軌を一にしている。

そして、それ以上に重要なのが二〇〇二年が終わってからの展望だ。サッカー、Jリーグは二〇〇二年が到達点ではない。むしろ、このイベントをひとつの契機として、大きく進化していくもの。やっと根付いてきたJリーグを、さらに盛り上げて太い樹としなければ、スポーツ文化は欧州に追いつくことは不可能だ。F・マリノスは、まずひとりでも多くのスポーツファン、サッカーファンを育成することがプロリーグになると信じている。

△横浜・マリノス(株)事業本部ホームタウン推進部部长兼運営部部长▽